
Endless Dreamer

縁茶筍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Endless Dreamer

【Nコード】

N0366Y

【作者名】

縁茶筍

【あらすじ】

「この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません」

一応お約束は言っておかないとね。このご時勢突っ込まれる可能性が否定できないのは悲しい。

「作者は初心者です」

自意識過剰の人間ほど自分に価値を見出そうとするのはねえ…。

「テーマは非。1日一回更新が目標です」

いいことじゃないか。出来ることなら完結も目標にして欲しかった

ね

始まりの前、夜明け前。

「どうも、狂言回しです」

……物語のプロローグから自己紹介はよしてくれだつて？そもそも名前すら名乗らず自己紹介と言わないで欲しいと。

それは大変だ。そもそもこれは物語のプロローグ以前。始まりの前、夜明け前。

僕はこの物語の主人公ではない。彼よりも先に名前を名乗るわけにはいけないのだよ。ご理解いただきたい。

「さて、お仕事を始めますか」

「この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません」

一応お約束は言っておかないとね。このご時勢突っ込まれる可能性が否定できないのは悲しい。

「作者は初心者です」

自意識過剰の人間ほど自分に価値を見出そうとするのはねえ……。

「テーマは非。1日一回更新が目標です」

いいことじゃないか。出来ることなら完結も目標にして欲しかったね。

……はて？この携帯の存在は誰にも教えた記憶はないのだけどね……

一応対応しようじゃないか。

「こちら狂言回し。どちら様かな？」

「」

「そうかい。教えてあげても結構だけど、何かあっても助けてあげられないよ？一応居候をさせてもらってる身だからね」

」

「ふむふむ、面白いからさ。何か彼に不満があるわけじゃない」

」

「では、成功は祈らないよ。ぜひとも僕に人生の円滑油を」

…切ったようだね。

「閑話休題」

話題を元に戻そう。…と言いたいところだけど、紙切れに書いてあった3行の文章を読むことが僕の仕事だった。

報酬はなし。あえて言うなら彼より先に出版を用意してもらえた事。

…はて？今日は電話を掛けてくる人が多い日だね。昨日まで着信0だったのにえらい違いだよ。

「こちら狂言回し。どちら様かな？」

」

「ヒロインはどうしたかと…それは僕の口から言つべき情報なのかな？残念だけど…」

」

「ふむふむ、なら問題なさそうだね。」

「彼女は主人公の家に同居しているようだよ」

」

「僕の正体も教えておくれと？それは無理な相談だ。どうせ話が詰まった時にでも出てくるだろうよ」

「けどどうそやましい身ではないから既出情報のみ教えてあげよう」

「仮名、狂言回し。主人公やヒロイン、作者とやらではない。主人公の家に居候させてもらっているよ」

」

「そつかい。ではでは」

「おう。お前がおめかしする程度の時間はあるぜ」

夢

夢…これは夢。

意識があるのに夢から覚められない時が稀にある。

「

昔のアイツが私に何かを語りかける。

「

今の私は問いかける。何故か言葉が上手く喋られない。

「

昔の私が笑っている。次の朝には雨が降るのに。

…もう起きなきゃいけないのに起きられない。

思い出が輝いて霧を生み出すのがよく分かる。一人で夕焼けを眺めているみたいで…

「

時の逆流を眺める。私の人生に儂さを覚える。

「

なんでアイツは平気なんだろう。…私だけ？

「孤独に咲く華を見つけ、名ま…」

…体を強請っている誰かがいる。

「意味も無く部屋に入られるのはお断りと言われているがな」

…人の下着を漁ってた変態が何言ってるの？

「俺だ。オレオレ。3年前の事を掘り出すのは卑怯だぞ。あの頃の俺は若かったから…」

…今何時？

「まだ日は昇っていないな」

はあ…

「アンタの無茶苦茶な行動に付き合つのは慣れてるけど、今日は特に用事はないでしょ。」

「ある。今日は収入確保のために重要な事がね」

この男は

「そういうのは昼の間に教えなさいよ…女には準備つてもものがあるのよ」

「思い出したのがお前の部屋に入ってからだからな。16歳の少女」

暴虐非道だ

「で？イタケな少女に付いてきて欲しいわけ？それならお断りよ。

私は眠いもの」

「どうせ俺とお前には睡眠なんか必要ないだろう？」

独り善がりで相手を理解しようとする気がない

「それだからってついていく理由にはならない。寝る」

「ついてこないと収入源が途絶えるぞ」

だけど、家を追い出された私を救ってくれた恩人でもある

「…分かったわよ。アンタの事だから早めに起こしてくれたんでしょ？」

「おう。お前がおめかしする程度の時間はあるぜ」

…はあ

「着替えるから出て。する事がないなら下のソファアームにでも座ってTVでも見てなさい」

「了解。ゆっくりとおめかしをするといい」

「政治経済に文化スポーツ、テレビにラジオ…そついや占いもあったな」

「さて、どうする」

下のソファでテレビでも見るか…録画してた適当な番組を見るのもアリだな。

普段は読まないが、新聞を読むという手もある。雑誌は…生憎読み終えたものしか家にはない。今日にでも買いに行こう。

そんな事を考えながら階段を下り終えてリビングにあるソファに座りこむ…前にファンヒーターの電源を入れる。

「電灯は…夜明け前には不似合いだな。TVから漏れ出る光のみで結構」

リモコンを手に持ち、適当なボタンを押す。

「さて、どんな番組があるのか」

基本テレビを見る習慣を持たない俺にはこの時間帯にどのような番組があるのか。残念ながらよく分からない。

……

ボタンを幾つか押し終えると俺は思わず口から言葉が漏れ出てしまう。

「TVに思考はいらない。大概は思考すべきところまで解説がついてやがるからな」

だから嫌いなんだ。近年テレビの視聴率が落ちてきているのはそこから辺に理由があるのではないか、と思いたくなる。

これでは録画しておいた番組すら見る気がなくなってしまう。

「下らん。俺の趣味ではない。新聞を読もうではないか。ヘイカモン」
郵便受けが一瞬だけ光ると新聞紙が這い出て俺の手元まで歩いてくる。世の人が見れば驚くかも知れないがこの家では珍しくない。

TVの明かりを元にしばし読みふける。

「ふむふむ…」

特段大きい何かがあった訳ではないので1面には冴えないニュースばかりが転がっている。

変革が起きないのはよろしい事だ。基本的には飯が食えなくなった時に起きるものを歓迎する理由はない。

世界は少しずつ変わっていけばいい。何も生き急ぐ必要性などない。

「政治経済に文化スポーツ、テレビにラジオ…そういや占いもあつたな」

感想は先ほどと変わらない。

ただ、新聞…いや、情報を発信する全ては中立に立つべきだな。

多少の思惑や妥協は良しとしても、そこに限度を超えた欲望や感情が入り混じると手に負えない。

「…ふう」

一通り読み終わるとTV以外から光が射し込んでいることに気づく。

カーテンの隙間から少しだけ光が漏れ出ている。実に心地いい光でファンヒーターで暖められた空気が野暮に思えてしまう。

ソファーに体を深く沈めて時計の方向に首を回す。なるほど、季節が夏ならもう朝だ。

なるほど...

「そっかそっか...」

「ごめん。モラルだったかしら」

2階から階段を下りる音が聞こえる。

そろそろ30分を過ぎる頃だから支度を終えたのだろう。

「終わったわよー。ってアンタまだ普段着じゃない」

「男の準備は5分もあれば問題ないからな。お前が家の戸締りの確認をしている間に準備完了さ」

女の支度にはなぜアレだけの時間が掛かるのか：多分男皆が疑問に思う。

生憎俺には答えを用意できないし、死後も理解することは不可能だろう。

「アンタねえ：人を起こしておいてそれはないでしょ：それだから常識が欠けてるって私から言われるのよ」

「何をいまさら：常識の外に住む俺とお前が」

「ごめん。モラルだったかしら」

モラル：多分この場合は道徳や倫理を指しているわけではなく、良識を言いたいのだろう。

「モラルは右隣の佐々木が食ったよ。今の俺にあるのは好奇心と金のみだよ」

「：右隣は高橋さんよ。佐々木って一体誰？」

「俺の脳内に居候してる悪魔。どこぞの異世界から命辛々逃げてきたらしいな」

「男？女？」

「さあ…？本人曰く性別はないらしいが姿は女で一人称は僕」
「追い出しなさい。今すぐに」

…そろそろおふざけする時間はないんだがな。まあコレの嫉妬する姿は珍しいし付き合うか。

「実体は俺が与えてないから問題ないだろう」

「アンタがソイツに惚れて私がこの家から追い出されたらどうするのよ？雑談に付き合うだけで大金をポンと出してくれる所なんてそっけないわよ」

うわぁ…コイツ悪魔より酷いな。まるで欲望を隠す気がねえ…。

「いろいろと言いたいが欲望は隠せ。お前家は裕福だったんだからそこ等の教育は施されてるだろ？」

「」

俺を睨んで返事をしない。これ以上おふざけする時間はないから正直に言おう。

「ったく。これ以上おふざけすると時間がまずいから白状するけどな、ウソだからな？さすがの俺でも脳内に悪魔は飼えんよ」

「…」

まだ疑っているようだ。ジト目で俺を睨んでいる。

「この世界には神は存在しないんだから悪魔もいるわけがないだろうが。たとえ何らかの手段で異世界から来たとしても消滅するしかない。力を維持できないからな」

「それを可能にするのがアンタの魔力でしょうが…その気になれば

不可能じゃないはずよ」

「悪魔を飼うだけの魔力を消費してたら俺の収入が途絶えるな」
「…」

まだ疑っているようだがこれだけ言えば大丈夫だろう。ウソは言っていない。

しかし…時間を大分浪費してしまったな。

「行くぞ」

「アンタ普段着で行ったらずいでしょうが…時間がないんだからさっさと着替えてきたら？」

「そうか」

一瞬だけ体が光る。

「行くぞ」

「」

「そうか」

金で時間を買えるなら結構なことじゃないか

「最低。それだから性交渉を拒まれるのよ」

歩いて乗って降りて食べてまた乗る。目的地の近くに着くとまた降りて歩き出す。

目的地の建物の扉には暗証番号を入力するための装置が備え付けられている。

16の数字を入力すると10秒間ほど扉が開いて閉まる。

内部は病院に似ている。全体は温かみを感じる白。だが臭いがそれを台無しにしてしまう。

エスカレーターを使って2階上がると長い一本道の廊下に幾つかの部屋があるが…どれも人が入って何かをしている。

一番奥の部屋だけが使用されていない。

「入るぞ」

ノックもせずに俺は扉を開けて入る。

「毎度彼女を連れてくるのは私に対する嫌味かね？」

昔ながらの黒縁眼鏡を掛けた30を過ぎているであろう男にそう問われる。

「少なくとも結婚している男が言える言葉じゃないな」

毎回この言葉を交わすのには慣れている。どうせ嫁さんから性交渉を拒まれているのだろう。

用意されていた椅子に座る。

「君は若いからそう言えるのだよ。君も彼女と結婚すれば分かるさ」

「…毎回同じ事言ってるけど、私はこの男と恋人関係になった記憶

はないわよ？結婚なんて持ってたの他」

おっさん特有のいやらしい目でニタニタ笑う。

「君もなかなか固いねえ？」

「最低。それだから性交渉を拒まれるのよ」

「ざまあ見やがれ」

「…そろそろ始めようか。で、今日は幾らほど君は魔力を売ってくれるんだい？」

「今週は所要で消費量が多かったから期待に添えられるほどはないぜ？精々金持ちの寿命を3ヶ月延ばす程度だよ」

「君は僕らの期待に沿えるほどくれた試しはないだろ？理由を付けて」

「魔力は並大抵のことを可能にするからな。その代わりにこの世界には極少量しか存在せず、それも遙か昔に使い果たした後だ。今じゃあ俺みたいな特異体質の人間から採取するしかない」

「だから出来る限り欲しい。君の魔力は量質とも類を見ないほどだ。扱力量もね」

「断る。俺が提示した量以上は悪用される可能性があるからな。お前達が俺の魔力を研究以外に使ってないか監視させてもらってるから嘘は効かんぞ」

「…はあ。君にもっと欲があれば僕はここまで苦労しないで済むのにねえ」

「今日売る分だけでも1か月分の生活費になるからな。そこまで欲張る必要性がない。過剰に儲ければ妬む馬鹿共が煩いのも理由の一つだ」

「魔力の色は基本赤色だね。賢者の石が赤色なのも魔力が赤色だからだよ」

「採取しよう。君は自力で魔力抽出する離れ業ができるけど一応国のお仕事みたいなものだからね…このちゃんとした空間内で専門の機械を使ってしないといけない」

「じゃないと魔力の大半がこの星を守るために作られた防壁に吸収されるからな。昔の人も厄介なものを残してくれたものだよ。せめて対処法くらい用意してくれたらどれだけの魔力を損せず済んだことやら」

「同感だね。ん、じゃあ腕を出して。何時も通り少しだけ痛みを感じるだろうけど」

「何もそう言わなくても血液抜いて魔力抽出するだけじゃないか。さすがにもう注射針に泣く子供じゃない」

「子供はすぐ育つねえ…君の担当になってもう5年だけとまだその頃はあんまりいい顔しなかったからね」

血が俺の体から出て行く。色は赤ではなく無色透明。本来ならヘモグロビンで着色されているはずの血液は俺のように極度の体内魔力を持っていると魔力で体を構成されるようになって体内で生成されなくなる。

俺と同じようなことを考えていたのか、魔力について語りだす。

「魔力の色は基本赤色だね。賢者の石が赤色なのも魔力が赤色だからだよ」

「何を今更。魔力はそのままの状態だと赤色だが、圧縮していくと赤 黒 白 無色透明へと変化していく」

賢者の石こと魔力塊が赤いと言ってもそれは質の悪いものだけで、俺が作り出すものとなると無色透明だ。桁が違う。

「体全体を魔力で構成させるに至ったのは歴史上100人も満たないよ。大抵は親しい人達が死んでしまつと異世界に行つてしまつから最高級の魔力塊は入手は極めて困難。…はあ、今この星に居るのは君と君の父だけだね」

「しかも親父は基本的に放浪してるから行方知らず。事実上俺だけだよ。国にわざわざ最高級の魔力をくれてやってるのは」

「だから、君が望むだけの金額やその他融通を利かせているんだよ。どうかも少し提供してくれないかな？ほら、その彼女を養うのも安くないでしょ？」

こうやって話すと組織に属すことは極めて大変なことが分かる。このオッサンだって好き好んで俺にお願いしているわけでもないだろうに…。

だからと言ってそこで譲ると、骨の髄までしゃぶられかねないから妥協は出来ない。歴史を調べれば魔力を保持している人達が大概不幸な生涯だったことは明白だ。

「断る。そんな人の心情も推測できないからセックスレスなんだよ。少しはコッチの事情も知ってるんだろうから承知してくれ」

「魔力の色は基本赤色だね。賢者の石が赤色なのも魔力が赤色だからだよ」(後
本来予定していた話の流れとズレが激しくなりすぎたので一旦こ
で打ち切りとさせてもらいます。
どうもまだ私には長編は無理だったようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0366y/>

Endless Dreamer

2011年11月14日10時15分発行